

Title	永遠回帰による差異の肯定について : ドゥルーズのニーチェ解釈にもとづいて
Author(s)	森, 正司
Citation	メタフシカ. 2002, 33, p. 169-182
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66670
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

永遠回帰による差異の肯定について

——ドゥルーズのニーチェ解釈にもとづいて——

ドゥルーズは、ニーチェにおける永遠回帰を「到達しうる限りの最高の肯定の方式」と呼んでいる。「永遠回帰というイデー、この肯定の方式——考えうる限り最高の方式」（『この人を見よ』）この肯定をドゥルーズは、多様性の肯定、偶然的肯定、差異の肯定として解釈する。

この論文では、『ニーチェと哲学^①』をテキストとして検討する。まず、ニーチェの「永遠回帰」の一般的理解^②に対してドゥルーズがどう解釈を加えたか、を具体性に富む隠喩である「骰子振りの議論」において、一回切りの存在の出来事が全く独立に続くなかで、回帰するのは存在ではなく差異であることを考察し、そこで現われる事態が、多様性、偶然の肯定の方式である永遠回帰であることを検討する。さらに、永遠回帰とは総合のことであり、その原理が「力（への）意志」であることを考察するなかで、永遠回帰が差異を肯定するこ

とを明らかにしたい。

一． 骰子振りの隠喩と永遠回帰

『ニーチェと哲学』全体を通してドゥルーズは、ニーチェを論じつつヘーゲルの弁証法を攻撃しており、この議論では多様性の肯定、差異の肯定と弁証法の攻撃を行う。一と多の弁証法は、一の統一の中に容易に回収されてしまう多様性という偽りのイメージを作っていると批判する。これに対して多様性は統一には還元されないものであることをドゥルーズは主張する。このことを以下で考察する隠喩のなかで、一回切りの存在の出来事が全く独立に続く事態を描き出すことで、ドゥルーズは回帰するものは存在ではなく差異であり、それが永遠回帰であるとするのである。

森 正 司

「遊戯は二つの契機をもつ。それは骰子を振るときの契機で、つまり投げられる骰子と、落ちてくる骰子である。」(29) この骰子振りの隠喩で大切なことは、ただ一度切りの骰子振りであるということである。「それは出た目の数に応じてそのものとして何度も生み出されることになる。」(29)これは次の文を解釈することで理解される。「何回もの骰子振りが骰子の目の反復を生み出すのではなく、出た目の数が骰子振りの反復を生み出す」(Ce n'est pas un grand nombre de coups qui produit la répétition d'une combinaison, c'est le nombre de la combinaison qui produit la répétition du coup de dés.) (29)すなわち前半の「何回もの骰子振りが骰子の目の反復を生み出す」とは、ある目的の骰子の目(大抵は勝ちの目)を確実に生み出すために、何回も骰子振りが行われることを示している。そしてこの何回もの骰子振りは、勝ちの目が出るまで一連の行為(振り方)としてあり、これは偶然を廃滅することである。ドゥルーズはこのような目的をもった何回もの骰子振りの不純さを、ただ一回限りでの偶然の肯定の立場から否定する。これに対して、後半の「出た目の数が骰子振りの反復を生み出す」とは、偶然の、不確定の骰子の目(Le nombre de la combinaison)だけが個々別々の一度切りの骰子振りを繰り返し生み出すことができることを言っているのである。したがって今一度前の文にもどると「そ

れは出た目の数に応じてそのものとして何度も生み出されることになる」とは一回切りの存在の出来事としての骰子振りがそれ自体、個々別々なもの、独立したものの、ただ一回限りでの偶然として「何度も生み出されることになる」反復の事態を意味している。それゆえに、ひとたび骰子を投げることには、偶然と多様性を肯定することになる。なぜなら骰子を一度だけ投げることは、統一の原理も含めあらゆる原理の存在を拒絶しているからである。この契機のなかには、あらかじめ決定されているものは何もない。秩序に属する多様性ではなく、目的への従属からも解放されている。予測不可能なもの、独創的な展開なのである。「骰子ふりは生成を肯定し、また生成の存在を肯定するのである。」(29)ニーチェによれば、骰子を一度だけ投げることは、存在の生成であり、純粹な多様性を意味する。このような「ただ一度の骰子振り」は、一度切りであるがゆえに、独創的な展開であり、予測不可能なものであり、不確定であり、これらの特徴からそれは生成であると言えるのである。またその上に統御、目的への従属、偶然の限定を排除しているゆえに、生成を「肯定すること」になる。またそのようにして生成が肯定される結果、生成の存在も肯定されることになる。「ひとたび投ぜられた骰子は偶然の肯定であり、骰子が落ちてきて出る目は必然の肯定である。必然は偶然により肯定されるが、それは、存在は生成

によって、一は多により肯定されるという厳密な意味においてある。」(29)

ここで「肯定」と「否定」について「偶然」を手がかりに、考察してみる。そもそも偶然はなぜ否定的なものとして前提されているのか。なぜ肯定されなければならないものとしてあるのか。偶然が否定的なものになるときには、自分に望ましい、獲得すべき目的を立て、そのために因果性、蓋然性を利用する。このとき偶然は因果性と目的性の働きによって廃滅されるべきものとして否定されるものになるのである。偶然そのものには何ら否定的な要素はない。目的への信念に人が捉えられたときに、偶然が偶然そのものではなくなり、否定性を帯びた「蓋然的な偶然」となり、全き肯定としての偶然が廃滅されることになるのである。世界は目的をもたず、希望されるべき目的も認識されるべき原因も存在しないという確信が持てないとき、別の言い方をすれば、一度切りの存在の出来事が独立なものとして続くという事態を認め得ないとき、偶然は肯定されないもの、否定的なものとして前提される。これに対して、回帰する差異である偶然が肯定されるときには、偶然の諸断片は必然的に結び合わされ、ニーチェの言う〈偶然Ⅱ必然〉あるいは〈偶然Ⅱ運命〉となるのである。ひとたび投げられた骰子とは「生成の肯定」であり、骰子が落ちてきて出る目は、「生成の存在の肯定」である。これは

一である存在は、多である生成によって肯定されるということである。

このようにひとたび投げられた骰子は偶然の肯定であるが、骰子が落ちてきて出る目(落ちてくる骰子)は必然の肯定となる。この必然(運命)は、偶然そのものの廃滅によってではなく、偶然が偶然の諸断片のまま結び合わされてきているものである。したがって、必然は、偶然そのものが肯定されればされるほど、偶然が偶然の諸断片のまま結び合わされている必然は肯定されることになる。このことは存在という必然的なものが生成という偶然的なものからなるように、一が多によって組合され、肯定されるのと同じ意味においてである。なぜなら、そのものとしての偶然にはただ一通りの(出た目の)組合せ (*une seule combinaison du hasard*) しかないからである。骰子を振る行為は、それぞれが一度切りのものとして、その都度、独立して行われるから、その行為の結果出た目の組合せ(偶然が偶然の諸断片のまま結び合わされているもの)は一通りであるはずである。これに対して、目的をもった骰子を振る行為は勝ちの目が出るように何度も行われるから、何通りもの出た目の組合せがある。「蓋然的な偶然」にはいくつもの組合せがある。この在り方は多数性の一として、偶然の必然として存在するからである。これは存在の能動的な創造である。骰子が落ちてくることは、

先ほど、必然が偶然の組合せによって組織されていると述べたように、一（単一性）や存在を組織するための契機なのである。

偶然、蓋然、必然の関係を整理するならば、偶然が否定されるとき、幾度にも分割される蓋然となり、偶然が一度かぎり
の全き偶然として肯定されるとき、偶然は必然となり、宿命
となつて肯定されるのである。

次にドゥルーズは、この骰子振りの隠喩を永遠回帰に関連させて考察し、投げられた骰子を第一の時間、落ちてくる骰子を第二の時間とし、この第二の時間を永遠回帰と考える。

「投げられた骰子がひとたび偶然を肯定すると、落ちてくる骰子は、ふたたび骰子ふりを回帰させる数や運命を必然的に肯定する。この意味において、遊戯の第二の時間はまた二つの時間の総体でもあり、あるいは総体と等しい遊戯者でもある。永遠回帰は第二の時間であり、骰子ふりの結果、必然性の肯定であり、偶然のあらゆる分枝を結び合せる数である。しかしまた、それは最初の時間の回帰、骰子ふりの反復であり、偶然そのものの再生産と再肯定である。」(36)最初の時間の回帰とは、最初の骰子の振り方、唯一の骰子の振り方が回帰することである。なぜならこの骰子振りは、ただ一度限りでの偶然を絶対的に肯定するものとして不変だからである。ここに永遠回帰の永遠性と回帰が位置づけられる。した

がつてそれぞれの出来事としての骰子ふりも、唯一の骰子の振り方として反復するのであり、ここに回帰と反復が並列して同じ意味として述べられていることがわかる。

投げられた骰子である第一の時間が多様性と生成の契機であるとすれば、ここで第二の時間である永遠回帰は「一」(統一)を組織する契機である。すなわち、それは偶然のあらゆる分枝を創造的に一つに結び合せることによって「存在」を構成する契機なのである。これが後にみる総合の原理としての永遠回帰である。それゆえに、骰子を投げる最初の時間の回帰、骰子ふりの反復は、偶然そのものの再生産と再肯定になる。

複数の骰子ふりは偶然を抹殺するから「一度で勝ちを占める骰子の目だけが、投擲の回帰を保証することができる。」(37)この真の骰子振りは必然的に勝ちの目を生み、この目がまた骰子振りを生む。この意味はすなわち、ただ一度の骰子振りだけが偶然を肯定し、この偶然から構成される必然が肯定され、他の数ではあり得ない独自の数がまた投擲の回帰を生み出すことになる、ということである。だから、他の数ではあり得ない独自の数は、個別なもの、独自なものとして回帰するのである。ここで回帰とは、個々別々のものが、何か統一されたものとして表象されるのではなく、独自のものの、差異そのものの存在として、存立しつづけることだと解釈で

きる。このようにみえてくると、「永遠回帰における運命(必然)は、また偶然的の「歓迎」である」(33)とも言える。したがって人間にとって偶然は、行為が実現されるといふ事実だけからしても肯定されるべきものであるのに対して、必然は純粹な觀念や永遠の本質という睿智的なものを価値あるものとして評価することで生を軽視することになっている。ところがこれまで見てきたように、ニーチェ的展望に立てば、偶然と必然は対立しないことになるのである。

二、永遠回帰と力(への)意志

骰子振りの隠喩においてドゥルーズが示したかったのは、絶えず変化し続ける生成の概念を、存在論の基礎に据えるために、永遠回帰の思想と関連させ、一切の偶然、生成、差異が肯定されることは、これらが反復し回帰することに他ならないことであつた。偶然、生成、差異が回帰すること、これが永遠回帰なのである。現実世界を支配する多様なものを統一する原理に代わる「永遠回帰」の原理の提出がここでなされる。

一般に、ニーチェの永遠回帰は時間の長さが無限であるのに対して、世界が一定量の力として、世界を構成する諸力の数とそれらの組み合わせの数が有限であると仮定し、無限の時

間の経過の中では、これらの諸力の間の一定の組み合わせが同じ順序で無限回繰り返されることになる、すなわち同じ出来事が永遠に回帰するという事態と、理解されている。

ところが、ドゥルーズはこれを解釈し直して、永遠回帰においては同じものは回帰しない。回帰するのは無限の戯れとしての生成、生成としての存在であるとしたのである。

(一) 永遠回帰の二つの定義

ここでは、ドゥルーズの永遠回帰の二つの定義、あるいは二つの側面を考察することで、永遠回帰が差異を肯定するものであることが示される。

1) 永遠回帰の第一の定義 —— 思弁的総合の新たな定立

「永遠回帰は絶対的な差異についての思想である。この原理は、多様なもののものの再生産の原理、差異の反復の原理である。」(33)それゆえに、「永遠回帰は最終状態あるいは平衡状態に対する批判を前提としている」(33)ことになる。生成は目的も最終状態ももたないはずである。この純粹な生成という思想は、どのように永遠回帰を基礎づけるか。このことの解答としてドゥルーズは次のように述べている。「生成するものの存在とは、生成し始めもせず、生成し終えもせぬものの存在とは、どのようなものであろうか。回帰するこ

と、これが生成の存在なのだ。」(54)このことをニーチェは「すべてのものが回帰するということは、生成の世界の存在の世界への極限的近接である、——すなわち、考察の絶頂。」と表現している。ドゥルーズはここで生成の背景に秩序化されたコスモスではなくカオスそのものをおいている。純粹に生成変化するものはみずから回帰してやまない。そのように生成するものが枠組みを絶えず更新しつづける形で存在すること、このことを永遠回帰と表現しているのである。

この考察は時間の問題(時間とその諸次元との総合)としても表現される必要がある。「瞬間が過ぎ去るには、それが同時に現在であり過去であり、また現在であり未来であらねばならない。現在、過去、未来としての瞬間の自己自身との総合的な関係が、その瞬間と他の瞬間との関係を基礎づける。それゆえに永遠回帰は移行の問題に対する解答である。」(55)これは次のように解釈できる。現在の事象はすべて過去の事象の回帰である。また現在の瞬間も事象も現在においてだけでなく、未来においても回帰する。そしてすべてのことは互いに緊密に結び合わされているのであって、この瞬間は、来るべきすべてのことを後ろに従えているのである。だから、この瞬間自身をも後ろに従えているのである。この総合的な関係において、瞬間が他の瞬間を肯定することになる。このことから永遠回帰は、存在するもの、一あるいは同一的なもの

の回帰ではないことになる。「回帰するのは一ではなく、回帰そのものが多様や多によって自身を肯定する一である。言いかえれば、永遠回帰における同一性は、回帰するものの本性を示すのではなく、反対に、差異を持つもののために回帰するという事実を示している。」(56)回帰するのは存在ではない。多様や多と表現されている偶然、生成、差異が回帰することである存在となるのである。ここで永遠回帰が一つの総合であることが導かれる。

ii) ニーチェの用語法の確定

次にわれわれは、ドゥルーズの述べる「ニーチェの用語法」をここで確定しておく必要がある。ニーチェは力(への)意志^①を差異的、発生論的である系譜学的境位と名付けた。この力(への)意志から、関係し合っている諸力の量的差異と、これらの力それぞれの質とが、同時に生じてくる。力はその量的差異に応じて、支配的、被支配的と言われ、その質に応じて反動的、能動的と言われる。諸力は本質的に差異をもち、質をもっている。力はその量的差異を、自身に与えられる質によって実現する。力の質は、その原理を力(への)意志のうちにもつ。

力の質と力(への)意志の質という二種類の質の区別はニーチェ哲学の中心に存在しており重要であるが、ここで能動的

と反動的、肯定的と否定的ということと力を質と力（への）意志の質から骨組みだけをまとめておきたい。

能動的と反動的とは、「力の質」を示し、肯定的と否定的とは「力（への）意志の質」を示している。肯定と否定は、「力（への）意志」を表現しており、能動と反動とは「力」を表現している。また能動と反動は、肯定し否定する力（への）意志の手段のようなものである。(60,61)能動と反動は、自身の目的を実現するのに欠くべからざる何ものかとして、肯定と否定を必要としている。したがって、肯定と否定は能動と反動からそこに内在しつつ外へあふれ出ていることになる。したがって、肯定は能動というわけではなく、能動的生成の〈力〉であり、能動的生成そのものである。「力（への）意志は力に付加されるのであるが、しかしそれは差別的、発生的な境位として、力の生産の内的な境位としてである。」(57,58)ここに力に与えられる〈力〉、二乗された力である「力（への）意志」の特徴がみられる。また同様に、否定はたんなる反動ではなく、反動的生成なのである。

ところで、生成の存在の中に、われわれを入り込ませるのはまさしく肯定である。なぜなら、能動的な諸力においては、肯定が最初であり、否定は一つの結果にしかすぎないからである。ところが反動的な諸力においては、否定が最初であり、それらの力は否定することによって、見せかけの肯定へと至

るのである。また、反動的な力の固有な仕事は、根源において能動的な力と反動的な力との差異が存在するこの力を構成する差異を初めから否定することであり、自身の出生地である差別的境位を無差異な状態にすることである。

ここで、反動的な力が能動的な力に打ち勝った場合、今度はその方が支配的、攻撃的となり、この力が能動的なものとなるであろうか。これに対してニーチェは、反動的な力は、分解を行うという。反動的な力は能動的な力とその能動的な力がなし得ることを分離する。次に「反動的な力が勝利するのは、それが能動的な力をその能動的な力のみなし得ることから引き離すことによって、能動的な力を、反動的な力よりもさらに根本的に反動的な生成である無への意志に委ねるからである。」(73)

そこで上記とは別の生成、われわれが知っている反動的なもの、反動化とは別の、力の能動化、反動的な力の能動化（能動的生成）について考察する必要がある。「ニーチェは、その諸帰結の果てにまで進んでゆく力を能動的な力と呼ぶ。」(74)次の事態は複雑だが重要である。「もし能動的な力が分離されることによって反動的になるとしたら、逆に反動的な力は分離することによって能動的になるのではあるまいか。」(75)例えば、反動的な力としての病気や障害は、私ができることの可能性を狭める一方で、私ができる新たな意志を私に

与え、可能性の限界まで進んでいく力を与えてくれる。反動的な力の可能性はここで大きく開示されることになり、ここにおいて反動的な力は能動化されることになる。

iii) 永遠回帰の第二の定義 —— 実践的総合の新たな定立

上記において反動的な力の可能性について考察したが、「人間は、本質的に反動的なものなのではあるまいか。反動化は人間を構成するものではあるまいか。それらは人間存在そのものの原理である。」(23)人間に於ける人間性の基礎にあるものが反動的な力の勝利の形態なのである。これに対して、力の能動性の選択と、意志における肯定の選択という二つの選択を行う原理として役立つのが、永遠回帰である。また永遠回帰は二重に選択的である。

まず、永遠回帰は思想という資格で意志に実践的規則を与えるから選択的である。「永遠回帰によって為されんと欲するごとくに、汝の欲するところを為せ。」(24)私が何を欲するにせよたとえそれが悪徳であろうとも、私はそれが永遠に回帰することも欲するような仕方、それを欲するのでなければならぬ。ここでは生半可な意志である不完全なニヒリズムや否定的なものは篩い落とされることになる。たとえ臆病、怠惰のような悪徳であっても、永遠の回帰を欲するとすれば、それらは能動的になり、肯定の〈力〉となると考える。

選択するのは、まさに永遠回帰の思想であり、それは意志を或る全的なものたらしめる、とはこのような事態を指し示している。欲することは意志すること、言い換えれば強さの度合が高くなること、創り出そうとすることである。すなわち、ここでは永遠回帰からはみ出すものをすべて意志から除外し、意志を一つの創造たらしめる。なぜなら思想という資格としての永遠回帰は、すべて道徳というものを脱却した意志が自律へと至るために、意志すること自体が新たな価値を創造する力をわれわれに与えるからである。ここに、〈意志することイコール創造すること〉という方程式が実現されることになる。さらに意志は、既に過ぎ去った出来事に対しては無力である。意志する者それ自身の内部に、過去へと遡行して意志を及ぼすことができないという苦悩がある。ここで意志とは創造する者であると言われる。創造せんとする意志は、「かつてそうであった」ということに対して「私は、それがそうであったことを欲したのだ」と言う。さらに「私は、それがそうであったことを今も欲しており、これからも欲するだろう」という。ここに到って、〈意志することイコール創造すること〉の意味が永遠回帰と関連づけられて鮮明になる。もちろんこの意志とは、力(への)意志なのであるが。

第二に、選択的な〈存在〉について、第一の選択はしかし、不完全なニヒリズムである幾つかの反動的状態、反動的な力

の状態を除外するのみで、ニヒリズムの意志のうちに強力な原動力を見出す反動的な力は、第一の選択に抵抗し、永遠回帰の中に入り込んでくる。この第二の選択は、「永遠回帰の教説における奥伝的な境位を形成している。」(78)

永遠回帰は、なぜ「ニヒリズムの極端な形態」なのか、もし永遠回帰がニヒリズムの極端な形態だとすれば、永遠回帰から分離されたニヒリズムの方は、たとえそれがどれほど力強いものであると、不完全なニヒリズムである。永遠回帰だけが、「ニヒリズムの意志」を完全に全的な意志にする。

というのも「無への意志」(volonté de néant) というニヒリズムの意志は、つねに反動的な力と同盟して現われるからである。無への意志は能動的な力を否定し、能動的な力が自己否定を行うように導き、自己自身に敵対するようにさせた。したがって、反動的な力はその勝利を無への意志に負っている。しかし一度勝利を獲得すると、反動的な力はこの意志との同盟を破棄し、自分だけで自分自身の価値を妥当させようとする。反動的な人間にとつての解決策は、「無への意志」よりは「意志の無」(un néant de volonté)の方を、何もせずに消滅することの方を選ぶ「おしまいの人間」(le dernier des hommes)となることである。これに対して、無への意志は今度は積極性、肯定性を發揮し、反動的な力との同盟を破棄する。そして反動的な人間である「おしまいの人間」は、

能動的に自己を破壊する「没落を欲する人間」となる。能動的破壊が意味するのは、無への意志における価値転換の地点すなわち破壊が、否定的なものが肯定する〈力〉に転換され、変換される度合いに応じて能動的になる地点である。すなわち否定が生の肯定を表現し、反動的な力を破壊し、能動性とその諸権利を回復してやるような地点のことである。否定は肯定する〈力〉の先駆けとなる。「価値転換はなぜ完成されたニヒリズムなのか」の答えは価値転換において問題なのは単なる置き換えではなく、質的転換だからである。ニヒリズムが完成されるのは、「おしまいの人間たち」を通過することによって、その彼方へ赴き、「没落を欲する人間」においてである。ここにおいて否定はなお自身を引き留めている一切の絆をたち切り、肯定する〈力〉となったのである。「この否定は肯定する〈力〉としての否定である。」(80)質的転換はここにおいてなされたのである。肯定が現実的で完全なものになるのは、前提としての否定的条件からの肯定があり、帰結としての否定的帰結からの肯定がなければならぬ。現実的な肯定は否定に先行され、また後行されるのでなければならぬ。後行されるとは、否定が反動的諸価値を結合し全体化し、ついでそれらを肯定する観点から破壊(能動的破壊)する事態を意味する。

われわれはここで永遠回帰の働きに注目しなくてはならぬ

い。能動化を生み出す永遠回帰の試練との関連では、ニヒリズムはそれだけではつねに不完全であり、弱々しく衰弱した反動的な生の保存の原理である。「そこで無への意志が永遠回帰へと運び戻されるとき、そのときはただ、無への意志が反動的諸力との同盟を放棄するだけである。」(79) 永遠回帰だけが、ニヒリズムを完全なニヒリズムにする。なぜなら永遠回帰は、否定を反動的諸力そのものの否定たらしめるからである。ニヒリズムは、永遠回帰によって、またその中においては、弱者たちの破壊、弱者たちの自己破壊として現われる。自己破壊においては、反動的な力はそれ自身否定され、無へと導かれる。自己破壊だけが、力の能動化を表現する。ところで、無への意志は、もともと「への意志」という積極性、肯定性を備えたものという見方が可能である。実際、無への意志が積極性、肯定性を発揮し、反動的な力との同盟を放棄するのであるから。ここに無への意志の積極性、肯定性が見られないだろうか。能動的な否定、能動的な破壊は強い精神の状態であり、強い精神は自身の内なる反動的なものを破壊し、それを永遠回帰の試練にゆだね、自分自身もまたこの試練に身をゆだねて、自身の没落を覚悟する。これが、反動的な力が能動的となる唯一の方途である。

さらに、否定は反動的な力そのものの否定となるが、この否定は単に能動的なだけでなく、先に見たように、価値転換

されたものとしてある。それは肯定を表現し、能動化を肯定する〈力〉として表現する。以上のことから、永遠回帰は反動的なものを能動的なものにする役割を果たす。「永遠回帰における第二の選択は、永遠回帰が能動化(能動的生成)を生み出すということのうちにある。」(80) それゆえに、「反動的な力が回帰しないことを確認するためには、無への意志と永遠回帰とを近づけるだけで十分である。」(80) なぜなら、永遠回帰においては、反動的な力は回帰することはない。永遠回帰によって、またその中で、力(への)意志の質としての否定は肯定に転換され、否定そのものの肯定、肯定する〈力〉、肯定的な〈力〉となる。第一の選択が、意志から永遠回帰という単なる思想に合わぬものを除外することであったのに対して、第二の選択にとって「問題なのは、本性を変えずには存在の中に入り得ないものを、永遠回帰によって存在の中に入りこませることである。」(80) ここで本性を変えずには存在の中に入り得ないものとは、ニヒリズムの意志の内に強力な原動力を見出す反動的な力のことである。

(二) 永遠回帰と力(への)意志の関係について

ニーチェは「力への意志」Wille zur Machtと言ひ、これは力を求めてそれに向かつていくものと連想され、力と意志はそれぞれお互いを対象としており、関係において隔たつて

いるものとして捉えられている。これに対してドゥルーズは、それを *volonté de puissance* (直訳すれば「力の意志」である) が、『ニーチェと哲学』足立和浩の訳者に則つて、今後は、「力(への)意志」と表記する⁽⁵⁵⁾と解釈した。この「(への)力」はドゥルーズの独自の解釈であり、「力(への)意志」は「力」を対象、目標として目指す「意志」ではないという解釈に基づいている。本来、ニーチェにおける力 (*force*) とは、あらゆる現象を構成する作用であり、それは常に他の力との関係のなかにあり、多数的なものである。そのため何らかの現象が成立するためには、多数の力が総合されなければならぬ。この状況におけるドゥルーズによる「力(への)意志」の記述は非常に複雑であるが、次のようにまとめられる。力 (*force*) とは、力と力との関係である。また「力の本質とは、その力と他の諸力との量的差異であり、この差異が力の質として表現される」(56)ところが一方で、「このように解された量的差異は、関係している諸力の差異的な境位 (*élément*) を必然的に指し示し、この境位はまたこの諸力の質の発生的境位でもある。」(55)力と力の量的な差異が力の本質であり、力の質であるが、一方で、量的な差異が、関係している様々な力、差異的な力が存在する場、環境 (*élément*) を示している。そしてこの場(境位)においては、力の質も現われるところの場(境位)なのである。

「力 (*force*) の、同時に差異的にして発生的でもある系譜学的境位、これこそが力(への)意志である。」(56)力(への)意志とは場(境位)だが、その系譜すなわち、力の起源としての場において互いに関係し合うところで生まれる力の量的な差異と、この関係の中でそれぞれの力に戻し与えられ質とが自ずから出てくることになる。このような事態から「力(への)意志は、諸力の総合のための原理なのである。時間と関わるこの総合のうちにおいて、諸力は同じ差異を再通過し (*les forces repassent par les mêmes différences*)、多様なものは再生産される。」(56)ここは理解困難な場所だが、力(への)意志と永遠回帰との関連を辿るうえで大切なところである。時間と関わる総合とは、時間とその諸次元との総合のことであり、現在、過去、未来としての瞬間の自己自身との総合的な関係が、その瞬間と他の瞬間との関係を基礎づけることを意味する。次に、「諸力は同じ差異を再通過し、多様なものは再生産される。」諸力が同じ差異を再び通過するとは、時間と関わる総合のうちにおいて瞬間が回帰するなかで差異が再生産されることを意味し、このなかで瞬間が瞬間を肯定するのである。このことを理解すれば、以下のことが理解されよう。「総合は諸力の総合であり、諸力の差異と再生産との総合である。永遠回帰とは総合であつて、その原理が力(への)意志である。」(56)このことについては、先

に「永遠回帰」という表現のうちに、同一的なものの回帰を読み取るなら、それは誤解である。回帰するのは存在ではない。…回帰するのは一ではなく、回帰そのものが多様や多によって自身を肯定する一である」(55)において、あくまでも、同じものの回帰ではないのであって、したがって回帰するものは統一されたもの(存在)ではなく、回帰すること自体で、生成する存在、差異をもつものの存在を構成する事実を示していることをみた。このことから、「永遠回帰は一つの総合と考えられねばならない」(55)ことになる。多様とその再生産との総合としての永遠回帰。この永遠回帰そのものは、先に考察した同一性ではない或る原理すなわち、力(force)の、差異的にして発生論的でもある系譜学的境界である力(への)意志に依存しているのである。

「力(force)とは作用の主体であり、力(への)意志とは意志の主体である。(La force est ce qui peut. la volonté de puissance est ce qui veut)」(57)あらゆる現象を構成する作用の主体が力(force)であり、力が経験的な領域に属するのに対して、その力を生産する内的な境界(要素)であり、経験的な領域を超えた次元に属するのが意志の主体である力(への)意志なのである。したがって、力(への)意志は「力に付け加えられるものであるが、それは差異的、発生論的な境界として、力の生産の内的な境界」(57)としてであ

ることになる。

三・ 結 論

これまで論じてきたことに加え、何が論じられなかったかをまとめておく。

ただ一度の骰子振りだけが偶然を肯定し、この偶然から構成される必然が肯定され、他の数ではあり得ない独自の数がまた投擲の回帰を生み出すことになる。だから、他の数ではあり得ない独自の数は、個別なもの、独自なものとして回帰するのである。ここで回帰とは、個々別々のものが、何か統一されたものとして表象されるのではなく、独自のもの、差異そのものの存在として、存立しつづけることだと解釈できる。骰子振りの隠喩においてドゥルーズが示したかったのは、絶えず変化し続ける生成の概念を、存在論の基礎に据えるために、永遠回帰の思想と関連させ、一切の偶然、生成、差異が肯定されることは、これらが反復し回帰することに他ならないことであった。現実世界を支配する多様なものを統一する原理に代わる「永遠回帰」の原理の提出がここでなされた。

永遠回帰は結局、三つの側面から捉えることができた。永遠回帰の第一の定義では、純粋に生成変化するものはみずから回帰してやまない。そのように生成するものが枠組みを絶

えず更新しつづける形で存在すること、このことを永遠回帰と表現しており、永遠回帰における同一性は、差異をもつために回帰するという事実を示している。

永遠回帰の第二の定義は、永遠回帰とは選択的である、ということである。そしてそれは二重に選択的である。ここで永遠回帰の第二の定義は、二つに分けられる。第一の選択が、意志から永遠回帰という単なる思想に合わぬものを除外することであったのに対して、第二の選択では、本性を変えずには存在の中に入り得ないものであるニヒリズムや否定を永遠回帰によってその本性そのものを転換し、存在の中に入りこませることである。ここでは永遠回帰は反動的なものを能動的なものにする役割を果たす。永遠回帰によって、またその中で、力(への)意志の質としての否定は肯定に転換される。

次に、力(への)意志は、能動的、反動的という力の質(量的差異)を生み出す。力(への)意志という諸々の価値の価値の、産出の境位である差異的な境位を設定する。これが差異的な境位であるのは、力(への)意志そのものの質である肯定、否定にしたがって差異をもつ価値を生み出すからである。またニヒリズムは単に力(への)意志の一つの質である否定であるだけでなく、この意志は否定の形態においてのみ認識される。またわれわれは力(への)意志を認識されていない側面、すなわち肯定すること存在根拠とする。肯定

は力(への)意志から否定的なものを一掃する根拠である。これが価値転換の意味である。

これまで、ドゥルーズの解釈した永遠回帰の思想と力(への)意志について考察してきた。本稿の目的は、永遠回帰が差異を肯定することを明らかにすることであった。

肯定が創造的なものとして現われ、自己展開してゆくのは、まさしくこの差異の境位である「力(への)意志」においてである。力(への)意志は多様な肯定の原理であり、また諸力の総合のための原理なのである。総合は諸力の総合であって、諸力の差異と再生産との総合である。この総合が永遠回帰を形成すること、またこの総合のうちにある諸力が総合の原理に従って必然的に再生産されること、すなわち永遠回帰とは総合であって、その原理が力(への)意志である。そして永遠回帰が存在であり、しかも生成を肯定する存在であるのと同様に、力(への)意志は一であり、しかも多によって肯定される一である。

またドゥルーズは永遠回帰と力(への)意志との関係を下のように述べる。「われわれは永遠回帰を、多様とその再生産、差異とその反復、との根拠である一原理の表現としてしか理解することができない。このような原理を、ニーチェは彼の哲学の最も重要な発見の一つとして提出する。彼はそれに力(への)意志という名を与える。」(95) 力(への)意

志が諸力の総合の原理であり、その原理の表現が永遠回帰であるということであるが、原理と表現の関係を論じることができなかつたのでこれを今後の課題としたい。

文献

Deleuze, G.: *Nietzsche et la philosophie*, P.U.F., 1962.

Nietzsche, F.: *Der Wille zur Macht*, Kröner, 1964.

注

(1) 本文中でのドゥルーズのテキストからの引用は、『ニーチェと哲学』(足立和浩訳 1982年)を参考にした。原文頁数は()に示した。

(2) ハイデガーは、『ニーチェ』においてドゥルーズとは異なる以下のような解釈を与えている。すなわち「力への意志」は存在者の体制として、「永遠回帰」は全体としての存在者の在り方として、表裏一体のものである。またニーチェの永遠回帰の思想が「形而上学の根本的境涯」を示すものと考え、存在者の体制とその存在様相へ向けられた問いに与えた答によって、「存在者とは何であるか」から「存在者の存在を問う」を規定することができるとした。そこでハイデガーは存在者の全体を視野に納めつつ、二つの答を与え、「存在者の全体は力への意志である」と「存在者の全体は同じものの永遠回帰である」とした。しかし、従来のニーチェ哲学の哲学解釈では、この二つの同時的な答えとして、しかも必然的に連帯する答えとして把握できなかった。「存在者の全体は力への意志である」とは、存在者は存在者として、ニーチェが力への意志として規定するものの体制を具えており、「存在者の全体は同じものの永遠回帰である」とは、存在者の全体は存在者として、同じものの永遠なる回帰という様相で存在しているということである。体制と存在様相という二つの観

点から答えが与えられるが、この二つの観点は、存在者の存在性の規定として、連帯し合うことになる。これによってニーチェの哲学において、力への意志と同じものの永遠回帰も連帯し合うことになる。存在者の体制は、そのつど特定の存在様相を、しかもその固有の根拠として要求するのである。

(3) 『権力への意志』 617番(原佑訳、ちくま学芸文庫、下巻1 48頁)。

(4) 力(への)意志の詳細は、二(一)の(二)で述べる。

(5) 『ニーチェと哲学』p315 訳注(五)、(六)を参考。

(6) これまで境位 (Valément) を場のようなものとして捉えたが、ここでは要素が相応しい。

(もり) しょうじ 臨床哲学・後期博士課程